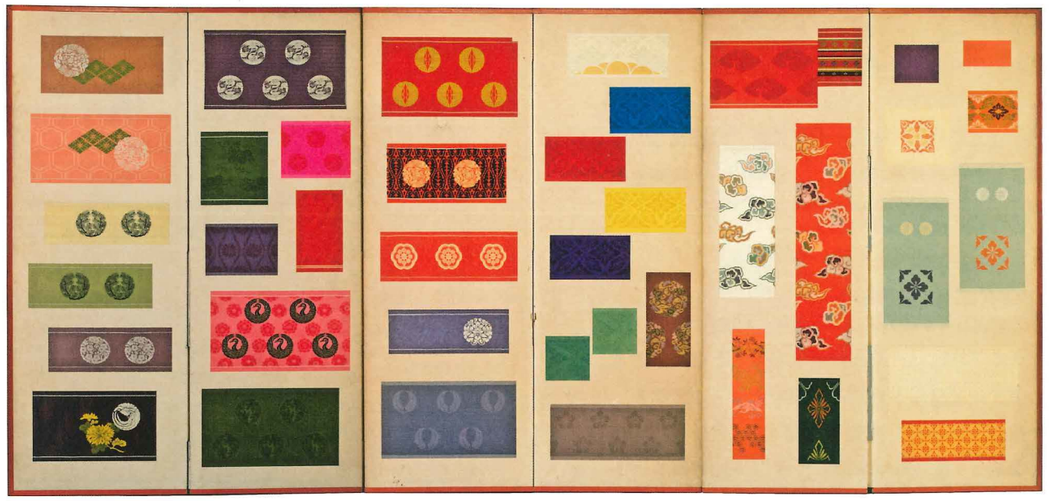
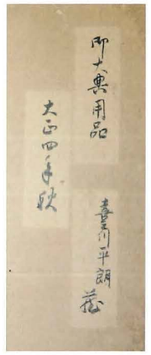
喜多川平朗旧蔵大正大礼調度及装束裂等貼交屏風

個人蔵

左隻



右隻



右隻第六扇裏面押紙

羅および、有職織物で重要無形文化財保持者（人間国宝）に指定された喜多川平朗（1898～1988）の旧蔵になる、大正大礼の調度や装束裂等を貼交ぜた六曲一双の屏風。右隻第六扇の裏面には喜多川平朗の自筆で「御大典用品　大正四年秋　喜多川平朗蔵」の墨書押紙がある。喜多川平朗は、京都西陣で500年にわたって続く名門織屋、俵屋の16代目平八の長男として明治31年（1898）に生まれた。平八は能百番と題した草木染による能装束を製織するなど、近代の西陣を代表する人物の一人である。俵屋喜多川家は、16世紀中葉に足利将軍家の被官人として、綾織製織の保護を受けた大舎人座中31人の内の１家であり、慶長年間に初めて唐織を織った家として知られている。江戸末期には、公家・女房装束に用いられる有職織物も手掛けはじめ、家業である唐織の技術と相まって優れた二陪織物を織り上げてきた。こうした喜多川家に育った平朗は、京都市立絵画専門学校日本画科に学び、大正12年（1923）兵役を終えた後、父平八のもとで製織の修業を始めることとなる。複雑かつ高度な技術を要する唐織の製織は、一人の手で行い得るものではなく、多様な各工程の技術者をまとめ上げる監督的な役割を果たしたのが、織屋としての喜多川家の当主であった。平朗は宮中へ装束を納めてきた装束司高田義男（1897～1985）と共に、大正の末年以降、正倉院御物の上代裂や鶴岡八幡宮・熊野速玉大社などの古神宝装束の調査・研究・復元摸織を行って、知識・技術面での研鑽を重ねた。そして、昭和3年（1928）行われた昭和大礼や、同4年の第58回神宮式年遷宮に際しては、昭和天皇の御装束など主要な装束・調度生地を製織した。

この屏風は、平朗17才の折に行われた大正天皇の御大礼に際して用いられた高御座や南庭の万歳旛、霊鶏形・頭八咫烏形大錦旛などの調度や、皇族方、及び参役者の装束裂などを貼り交ぜたもので、収集・仕立ての経緯などは明らかではないが、平朗の元に記録・参考用として所蔵されたものである。大正大礼の調度・装束裂は「大正大礼記録」に裂見本が含まれており、本作と対照することができる。平朗による有職織物研究の一端を伝える作品である。

◆コラム◆

西陣大舎人座文書

個人蔵

綾・錦・羅など後世の有職織物につながる高級織物は、古代において大蔵省下の織部司で技術保持と製織がなされてきた。しかし統制の弛緩から機織の私営化が進み、織部町の織手が隣接する大舎人町で綾織を行うようになり、室町時代前期には座を組織し、大舎人の綾の名さえ生まれた。こうした中で起こった応仁・文明の乱は有職織物の製作に甚大な影響を及ぼし、織手は四散することとなる。乱の後、京都に戻った大舎人座の人々は後に西陣と呼ばれる地で製織を再開した。３通からなるこの古文書は、喜多川家の先祖も含まれる大舎人座中31人が足利将軍及び御台所の被官人として保護を受けた際の文書である。この古文書は、幕末に編纂された「西陣天狗筆記」（井関政因編、弘化２年奥書）に引用が知られるのみであったが、昨年新たに発見されたもので、西陣織の歴史を伝える重要な史料である。

（6～11頁　ＥＦ共同研究員・田中潤）